

夏帽子

前田典子

樹の抱く時間に触るる余寒かな

三月十一日不意に葉がすべり落つ

春雪のふかまる夜を骨煮込む

亀鳴くやわが代にて墓閉ざすこと

初蝶の行く手ゆくてのひかりかな

逃水を追ふや私を追ふやうに

麦秋や墓石おもひのほか熱し

隣家まで自転車で行く栗の花

手になじむ卵のカーブ梅雨きざす

葭切や湖水は湖を抜け出せず

ノートの余白ただ見てをりぬ沖縄忌

こめかみは淋し揚羽過ぎゆけり

畦の影たしかなりけり大青田

さすらふやうに葛切を掬ひけり

とりけものみな素手素足ひろしま忌

空蟬は遥かな海を見てをりぬ

原爆忌傘をひらけば骨がある

夏帽子杖に被せて黙祷す

全集の汚れに差あり晩夏光

帰省子の凭れてゆきし柱かな

あてし刃にぶつと西瓜が鳴りにけり

遺影笑む角度に寄りぬ盆用意

鬼灯をきれいに鳴らし家を継ぐ

秋蝶やすぐ砂尽きて砂時計

見舞ふべき人あり新藁白ひくる

水仙の向きに意志ある難儀かな

包丁に鱗張り付く初しぐれ

菊を焚く燻りに人寄りにけり

木枯しに慣れず一樹のなほ戦ぐ

狐振り向き別のわたしを見つめをり